episode.01

持続可能な温泉地を目指して
～菱刈鉱山と温泉の歩み／温泉地の努力～

話し手 伊佐市郷土史編纂委員・南九州郷土研究会会員
別府 晋一郎（べっぷ しんいちろう）さん （昭和 27 年５月７日）

聞き手 鹿児島県立大口高等学校
３年　今吉　菜緒
３年　田中　大稀
３年　中隈　春輝

「伊佐の歴史発見」

小学校５年生の時、担任に曽木の滝の少し上流のところに校外学習で連れていってもらって、遺跡の発掘をしたことがありました。矢じりや緑色の勾玉、錐だとか、あと土器類の破片もいっぱい出てきました。そういったことも記憶の底にあって、定年後に伊佐に戻ってきて、何やろうかなって考えた時に、市の広報の中にふれあいサークルの案内を目にしたんです。いくつかある中から、「ふるさとの歴史に学ぶ」という講座と「ふるさと探訪」という講座を受講しました。そこでいろいろな所に案内されたりとか、説明を受けたりしたことを通じて、どんどん郷土史にはまっていっていきました。

「温泉地の誕生」

元々、湯之尾温泉があった地域っていうのは温泉が自噴している場所でした。文化７（1810）年頃に地域の人がここを温泉地として営業しようということで薩摩藩から「“湯守り”を置く」という許可を取ったんです。“湯守り”という藩に指定された人が、この地域での温泉事業の許認可権を持って、いろんな人が事業に関われるようになりました。また、その時にお湯の神様を祀ろうということで、温泉神社を建立しました。それ以降ずっと温泉地として、この辺りは結構賑わっていました。

1981 年に菱刈鉱山で有望な金鉱床が見つかり、鉱山開発の会社が 1985 年から出鉱を始めました。産出された金鉱石は精錬され、純度 99.99％の純金になります。

年平均 6t 前後の金の産出量は、過去の日本の金鉱山に比べても圧倒的な量です。

時代の違いで、簡単には比較はできませんが、佐渡金山は 20 世紀後半までの約 400 年で 83t あまりの金の産出に対して、菱刈は 40 年で約 260t。

試掘を始めて鉱山としてやっていくとなって、採掘の妨げになる熱水を抜き始めたのが 1984 年。この時期に地盤沈下が起こり、温泉が出にくい状態になっています。

でも鉱山開発の会社、国、県、市などが協議して協定を結び、お湯の供給や移転などの各種協定を結んでいます。

「資源の有効活用を目指して」

現在、菱刈鉱山では、鉱石を採掘するために、海抜－81 mの所から熱水を汲み上げています。この熱水は処理して安全な状態にしています。これを温泉水として、いろんな浴場に供給しています。温泉水の供給をして、残った分は廃棄されています。

無駄に捨てられている温泉を、もうちょっと工夫してやっていけば、もっと地域を潤す資源としても活用できます。限りある資源は有効に使ってほしい、こうして使えばどうなのかなっていうアイデアとかを共有できるような環境が、これから先の社会の中にできていけばいいですね。